

訪台団記録

神戸 信寅

禅研究所参禅会（田島柏堂会長）では、この度「日華友好訪台団」（団長・竹田鉄仙学長、副団長・田島柏堂禅研究所長）を結成して、七月二四日（土）より二九日（木）まで、六日間の日程に従い、各地を歴訪し、所期の目的も達成して多大の成果を得ることができた。

この訪台団研修の趣旨は、民衆に息づいている台湾仏教や曹洞宗関係の寺院・別院跡の現状を知ることと、学院の姉妹校である臺北高級中学校への親善訪問や、台湾省議会の見学等を軸に日華友好の実をあげるにあった。以下は、台湾訪問における簡単な覚え書きである。

七月二四日（土） 訪台団出発の日である。朝から曇り空で、いまにも降りそうである。午前九時前後になると、三三五五国鉄名古屋駅西口に団員が参集してきた。九時三〇分、阪神の貸切バスにて一路大阪空港へ向う。途中、大津インターを出たところで昼食をし、小休止。大阪空港に着いたのは、午後一時三〇分頃であ

った。雨が既に降っていたが、飛行にはなんら影響はなく、出発は予定通りということであった。一四時より空港の特別室にて結団式、添乗員二名を加えて、総勢三名であったため、三三観音の巡礼団と名付けて悦に入る。結団式では、竹田団長、田島副団長の挨拶があり、続いて添乗員によって、搭乗手続き等の説明がされた。昨年の訪中に参加した者が大多数のため、和気あいあい

で、次第に団員のエンジンも訪台に向け始動してきたようだ。一六時五〇分、いよ／＼出発である。定刻どおり、日本アジア航空二五八便DC-18は台湾の高雄に向け飛び立った。台湾に近づくと、山や河川、田園風景が雲海の間より見え隠れしてきた。険しそうな山々や切り立った溪谷を見ながらしばらくすると、われわれの乗った機は、ぐんぐん高度を下げ、現地時間の一九時（日本時間より一時間遅れ）に高雄空港に到着した。入国手続きを済せ、バスで最近建てたらしい「白金漢大飯店」^{パッキンガムホテル}（七賢二路三九四号）に向う。このホテルは、本学の留学生・許永芳君の

父・許漢水氏の経営になるもので、高雄市の中心街、愛河寄りに二〇〇室を有する近代的なホテルである。ホテルには、漢水氏をはじめ、高雄市や近郊近住の卒業生等が集まり、地方父兄会の国外版の役割を果たしていた。

われわれは、ひとまず部屋に落ち着き、夕食のためバスにて「國賓大飯店」に向う。この夕食は漢水氏の御好意によるもので、料理は広東料理であった。グセのない味で、誰の口にもあいそうであった。

高雄市は海山、それに空港、鉄道と台湾南部の観光、交通の中心であることは勿論、一二〇万の人口を抱えた一大商工業都市である。われわれが、高雄に着いて感じたことは、若く非常に活気に満ちた都市であるということと、他の地方でも同じかもしれないが、オートバイの多いことであった。乗り方も二人乗りは普通で、曲芸しているように多くを乗せて走っているのもよく見うけたものである。また、街並は愛河という川に沿って南国的な並木や優雅な街路灯があつて、心を和ませてくれる。

七月二五日（日）曇り空であつたが、気温は三五度程であろうか、非常にむし暑い。これから、数日間、この真夏の暑さと付き合うことになるであろう。しかし、坐禅で鍛えた参禅会員連である。暑さに会うては暑さを熱殺してと、暑さに親しんでいかねばなるまいと肚をきめる。

七時三〇分より朝食、八時三〇分、バスにて市内外の観光に出



蓮花潭の竜虎塔

が残っており、あちこちには土鶏が餌をさかんにつつき、長閑かな田園風景をなしていた。

一方、蓮花潭の近くの山（半屏山）では石灰岩が削り取られており白い岩肌をみせていた。おそらく、そうとう高い山であつたのであろうが、山の姿をなくしつつあり、古い壁とは対照的であつた。

発す。まず、北西約一二キロにある「蓮花潭」へ、文字どおり美しい蓮池である。湖畔には四重の仏塔春秋閣と、七重の竜虎塔一対がある。さらに、「東南帝関」と書かれた額が掲げられた啓明堂や、豪華な孔子廟の建物等があつた。付近には歴史を物語る古びた壁に囲まれた家屋敷



澄清湖の九曲橋

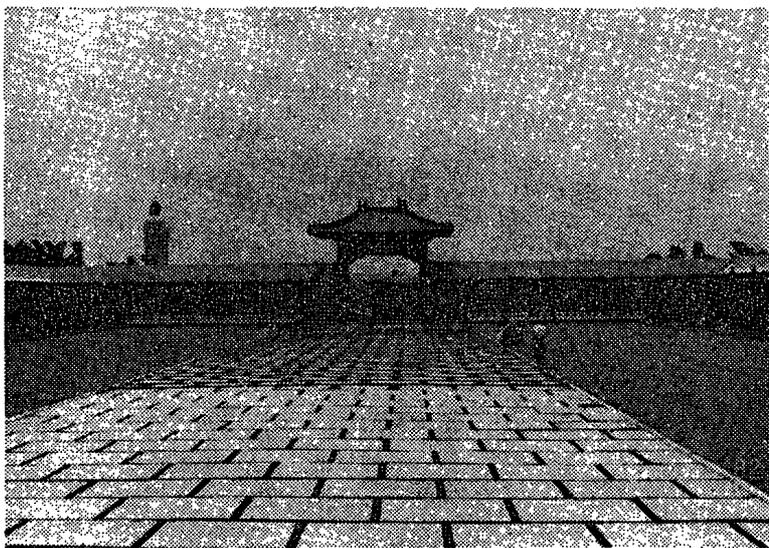
次いで「澄清湖」に向う。これは、中国の西湖八景を模して改造された人造湖であるという。名のとおり澄清な湖水で、透き通っており、中国式建物や樹木が湖面に映え、鳥が鳴き花が咲き、変化にとんだ景色はすばらしい。ちなみに、澄清湖の八景として、第一景・梅隴春曉、第二景・曲橋釣月、第三景・柳岸觀蓮、第四景・高丘望海、第五景・深樹鳴禽、第六景・湖山佳氣、第七景・三亭攬勝、第八景・蓬島湧金が数えられている。

正午近くになって、高雄市郊外の「仏光山(寺)」に到着した。仏光山は戦後(一九六六)釈星雲師によって開創されたもので、その活躍には目を見張るものがある。一五万坪の境内には二メー

訪台団記録(神戸)

トルの観音像五〇〇体あまりに取り囲まれた、高さ三六メートルの大釈迦立像(接引大仏)をはじめ、白衣大士聖像と一万体の観音菩薩が安置された万仏大悲殿、三尊仏を安置した大雄宝殿、文殊菩薩を安置した大智殿、そして不二門等。その他、多くの仏菩薩が点在しており、一大仏教公園というにふさわしい。また、仏光山には叢林大学や養老院、宿泊施設、それに教育・文化・慈善・福祉等、あらゆる事業をてがけており、現在も第三期、第四期と長期的計画が遂行中であり、その活力ある働きには、これからの仏教のあり方として見習うべきものも多い。

あいにく釈星雲師は所用のため外出しており、会う機会はなかったが、知客(尼)和尚の案内で、山内を

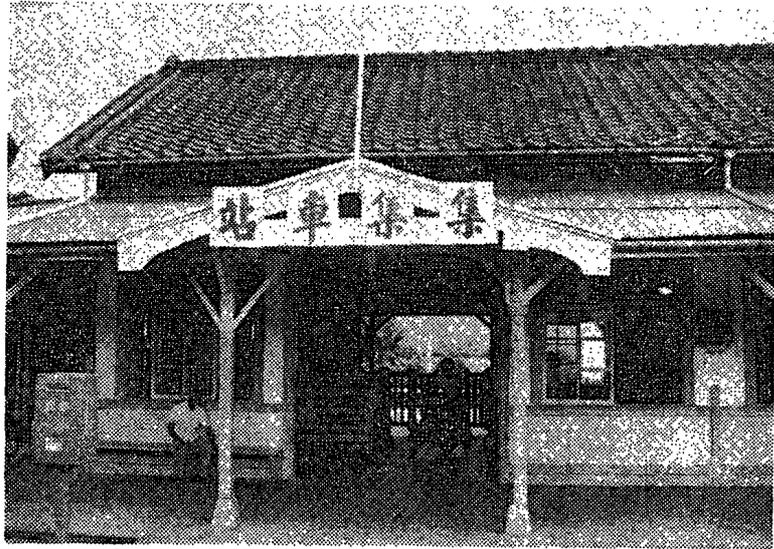


大雄宝殿より山門をみる

一巡し、広大な大悲殿においては、学長を導師に拝登の読経をした。昼食は大食堂脇に特別室が設けられており、心のこもった精進料理をいただいた。

仏光山を後に、今夜の宿泊地「日月潭」に向う。途中、日月潭に登る入口にある「集集駅」にて小休止をした。この山奥の

小さな駅は、日本的な木造の駅舎であった。近くには、かつて日本人が生活していたのであろう、日本家屋も空家の状態であった。老人子供も、非常に懐つこく、近寄ってきて話しかけてくるし、子供の遊びを見ていると、日本の子供が遊んでいるのと変わらず、われわれも親しみを感じた。また、この地方はバナナ・竜眼をはじめ果物の豊富なところとみえて、老婆がさつそく、リヤカ



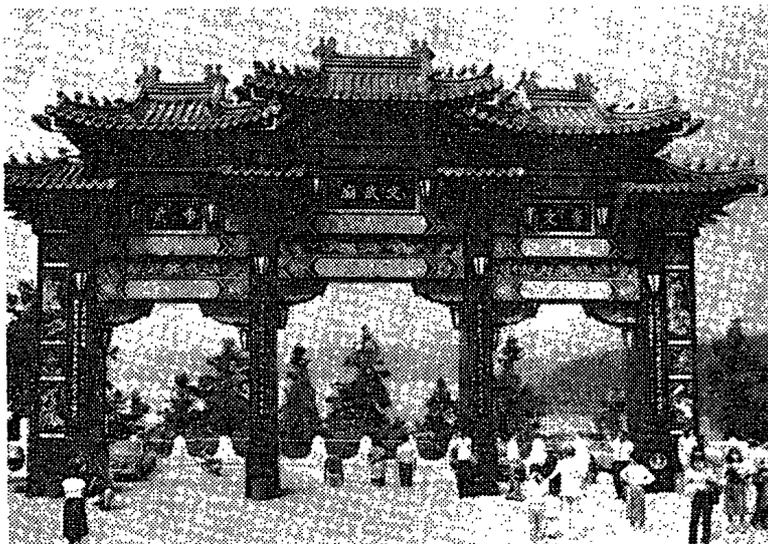
日本的な集集駅

ーに果物を満載して売りにきた。山々は、日本のように四季の変化はないが、樹木の緑が濃く薄く格別の趣きがある。しばらく行くと、遠くに、一きわ葉が生い茂った烏竜茶の大木が目についた。やがて、慈恩塔や湖水が見えかくれしてきた。いよく日月潭に近づいたわけである。見えかくれする慈恩塔は遼宋時代の様式による八角塔で、高さ四五メートル二五センチ、塔の先端がちょうど海拔一〇〇〇メートルである。塔の九階には、高さ二メートル、重量一八〇〇キロの銅鐘が吊るされており、さらに、塔のうしろには蔣總統の母を記念する堂があるという。

午後六時三〇分、ホテルの日月潭大飯店に着いた。さすが、高雄市とはちがひ、気温も約二四度と別天地のようである。このホテルは、湖水の北に位置し、プール等の設備を有し、近くにはゴルフ場等ありで、リゾートホテルといったものであった。

夕食後は、高雄民族舞踊の見学等でくつろぎ、酒を酌み交し雑談に時の過ぎるのを忘れていた。団員も、ようやく旅に慣れてきたのか、本来の自分に戻ってきたようである。

七月二六日(月) 薄曇りで、暑くもなし寒くもなしである。ホテルのプール越しに、周囲の山林がもやのため墨絵のように見え、なんともいえない美しさである。この日月潭は周囲三五キロ、水深三〇メートル、湖面の高さは海拔七二七メートルという高山湖である。湖中には小さな光華島があり、この島を境界に「日」の型と「月」の型の部分になっているところから日月潭の名がつい



廟所より日月潭を見る

たとか、まことに太陽に輝いてよし、月明りに映えてよしといえよう。また、この湖水は非常に神秘的であるため、おそらく、もの悲しい伝説が幾つか秘められているのではあるまいか。

朝食は八時、出発は九時であった。まず、湖畔にある「文武廟」へ、文の神の孔子と武

の神の関羽や岳飛を主神として祀ってあるところから、この名があるという。一九七二年に修復され、その広さは台湾随一という。建物や色彩も、囲りの自然に調和しており心も落ちつく思いである。近くには、玄奘三蔵の霊骨を奉安するため、一九五六年に建てられた玄奘寺、その裏山には先の慈恩塔等もあって、遊覧船からの眺めを楽しませてくれた。

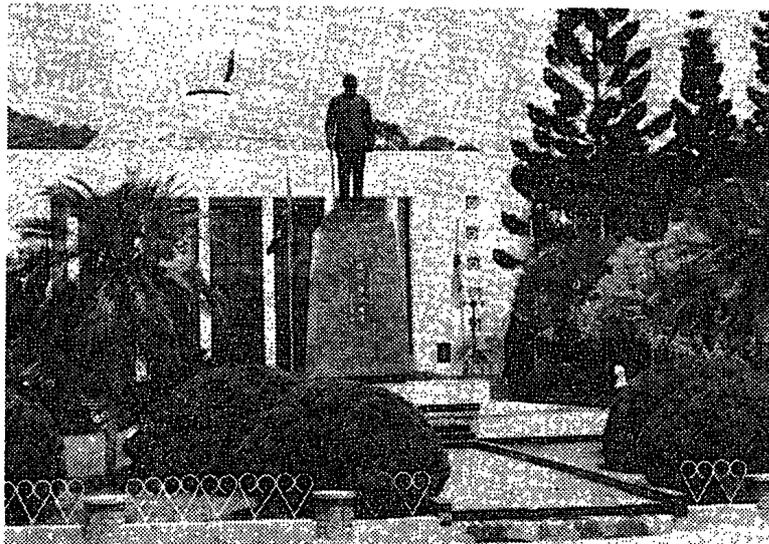
訪台団記録(神戸)

一通り日月潭を見学したのち、バスで台中郊外の「台湾省議会」に向う。途中、レストラン兼土産物屋の叙蕉園で昼食をする。バナナの林に囲まれ、バナナの葉をいたるところに使ったレストランである。日系人の経営とかで、日本語もよく通じ、食事にも気が付かわれていた。

腹ごしらえをすませ、また、バスに揺られて、しばらくすると台湾省政府の所在地、中興新村に入る。この都市は一九五七年に台北市にあった省政府を、地理的に台湾の中心であるここに移したもので、広い舗装道路、芝生や木立など、よく整備され行政都市としての機能をはたしているところである。各庁の庁舎などの建物を左右にながめ雑談をしているうちに「台湾省議会」のゲ



叙蕉園



台湾省議会

機関で、公選により七三名の議員が選出されて議事が運営される。任期は四年とのことである。議事堂近くには議員宿舎、図書館等が建ち並び、並木や芝生がよく手入れされており、町全体が一大庭園をなしていた。省議会の右手東南には、「万仏山万仏寺」（住職・釈聖印）という新寺があり、その堂の上に金色に輝く七メートル余の薬師仏が鎮座していた。左右に一八羅漢があり、よ

トが見えてきた。ヤシ並木を入れて省議会の正面玄関につく。省議会では、本学の卒業生で省議会議員の邱泉華氏の出向いをうけ、諸施設等の案内等お世話になった。また、省議会の役割等を映写を通して説明をうけた。それによると、この省議会は 中華民国台湾省における民意の代表

くまとまった美しい寺院である。

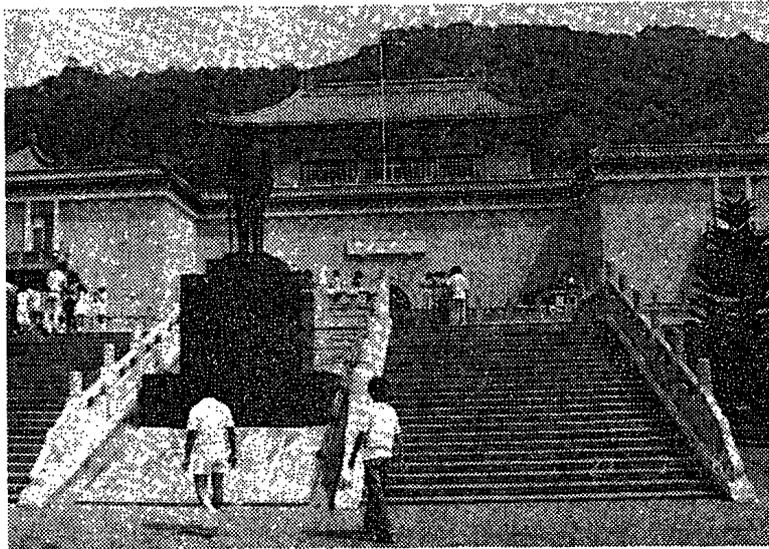
省議会をあとにして、われわれは、台中駅を一五時一二分発の特急列車に乗り台北へ向う。台北に一七時二〇分着、バスにて今夜からの宿舎「未来香格里拉犬飯店」へ、各自の部屋で旅装を解き、夕食は七時三〇分より、近くの「豪華酒店」で、



万仏山万仏寺

民族舞踊やアクロバット等の豪華ショーをみながらの食事であった。紹興酒での度々の乾杯も酒仙（酒豪）ぞろいと見え、呼び水のようにであった。ともかく、気分も腹も皆が満足であったにちがいない。

七月二七日（火）午前中は忠烈祠等を見学して、中国五千年來の文物六二万余点を蔵しているといわれる「故宮博物院」へ、許



故宮博物院

されるものならば何度でも足を運び鑑賞したいものであった。昼食は、学院の姉妹校である「臺北高級中学」の招待により、故宮博物院の正面にあるレストランで、台湾式のバーベキューで腹ごしらえをして、士林区福林路にある臺北高中を親善訪問、懇談会をもった。

この学校（理事長・陳清汾、校長・彭榮傑）は、はじめ台湾仏



臺北高中校史

教中学林といい、続いて曹洞宗台湾中学林、台北中学、そして臺北高級中学となつて現在に至つていくというように、日本の曹洞宗との関係は深い。その上、校章が「愛中」といわれていた当時のものと同じものを現在も使用していることからして、「愛知高校」との結びつきは特に強いものがある。キャンパスは七千九百余坪であるが、普通・商業・電工・美工等の各課程があり、生徒



奉北高中での懇談会

訪台団記録(神戸)

数は一〇三クラスで五千余名の男女共学の学校である。台北中においても私立校としては屈指のものである。この他に、女子部というのが台北市内の曹洞宗台北別院跡と隣り合ったところにある。

ところで、台湾の教育制度は義務教育が九年間、その上に高校大学等があつて、日本と似ている。その他、男子は二一歳で二年間の兵役義務があり、学生は休暇中に訓練を受け、残りの年月は卒業後という。因に、ここに一九八〇年の台湾の学校、学生数を臺北高中の先生より聞いたメモがあるので記してみると、

- ※大学と専門学校一〇四校(三四二、五二八名)
 - 大学一六校……………一三四、三七九名
 - 国立学院一校……………二五、〇一五名
 - 専門学校七七校……………一八三、一三四名
 - ※中等学校一、〇一一校(一、五九八、〇二八名)
 - 職業学校一九一校……………三四八、四〇一名
 - 高等学校一八二校……………一七九、四九七名
 - 国民中学六三八校……………一、〇七〇、一三〇名
 - ※国民小学校二、四〇一校(二二二、五九五名)
 - ※補習学校(三九三、〇五七名)
- ということ、学生総数は国民の二五、六%をしめているとのことである。また、臺北高中には、われわれ訪台団より親善訪問の記念として、ビデオテープ二〇巻、図書三一冊を寄贈してきたの

で、その寄贈目録も併せて、ここに記しておこう。

※ビデオテープ二〇巻

- ① 通信高校講座、物理I、物理の世界
- ② " " " 物理の学び方
- ③ " " " 力のはたらき
- ④ " " " 運動と速さ
- ⑤ " " " 速度と合成
- ⑥ " " " 生物I(入門講座)生物を学ぶこと
- ⑦ " " " () コアラを待つ動物園
- ⑧ " " " () 身近で学ぶ
- ⑨ " " " () 生物の特徴
- ⑩ " " " () 細胞の構造
- ⑪ " " " 化学I、ものを純粹にする
- ⑫ " " " 粒子をとらえる
- ⑬ " " " 原子量・分子量
- ⑭ " " " 粒子の集団
- ⑮ " " " アボガドロと分子
- ⑯ " " " 古典2I・古文、万葉集をのこ
- ⑰ NHK特集、永平寺への道
- ⑱ テレビスポーツ教室、柔道(1)投げ技
- ⑲ 全国高校サッカー選手権大会、愛知高校VS大淀高校
- ⑳ コスモス・宇宙、天国と地獄(2)

※図書三一冊

- ① イメージパースペクティブデザイン
- ② 色彩
- ③ 人物デッサンの基礎
- ④ グラフィックデザインの実技
- ⑤ エディトルアルデザインの实技
- ⑥ 理解しやすい物理(Ⅰ)
- ⑦ " " (Ⅱ)
- ⑧ チャート式物理(Ⅰ)・(Ⅱ)
- ⑨ " " 化学(Ⅰ)
- ⑩ " " (Ⅱ)
- ⑪ 化学精義(Ⅰ)
- ⑫ " " (Ⅱ)
- ⑬ チャート式基礎からの数学Ⅰ
- ⑭ " " Ⅱ B
- ⑮ " " Ⅲ
- ⑯ 新研究・数学Ⅰの鉄則
- ⑰ " " Ⅱ Bの鉄則
- ⑱ " " Ⅲの鉄則
- ⑲ 総解英文法
- ⑳ 基礎からの英語
- ㉑ 新自修・英作文

訪台団記録(神戸)

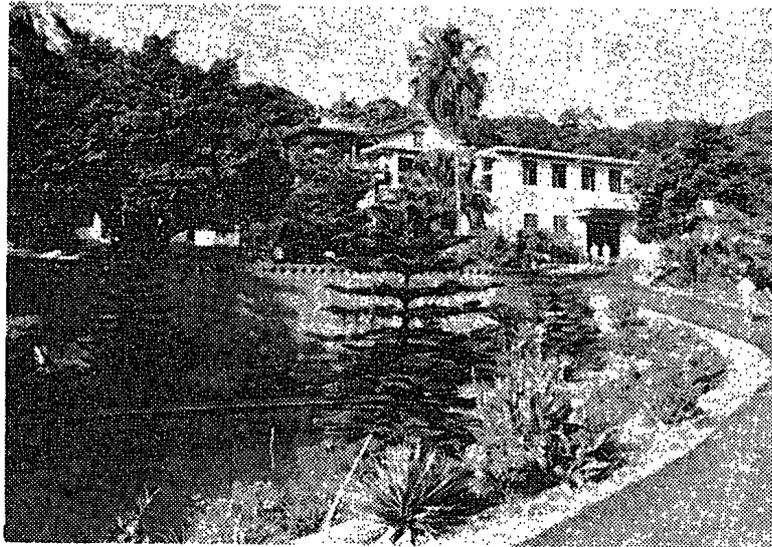
㉒ 新々英文解釈研究

㉓ 仏教聖典四冊(中英対照一冊、和英対照三冊)

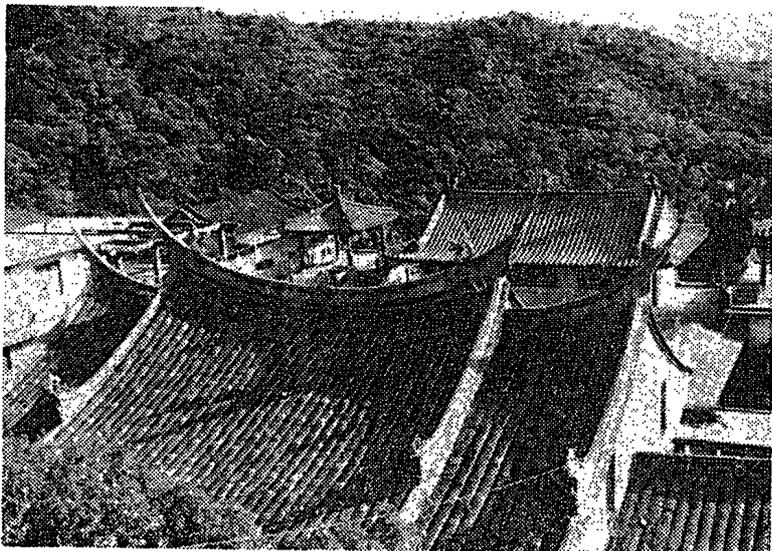
㉔ 愛知学院大学入試問題集五冊

われわれは、泰北高中をあとにして、基隆市郊外にある「月眉山靈泉寺」へ、この寺は北台湾仏教発祥の古刹として、また、曹洞宗の教育・伝道教化等の拠点として、曹洞宗の台湾における本山のような役割をはたしてきた寺であった。さらに、泰北高中とも関わりの深い寺でもあった。この靈泉寺の囲りは、山あり谷あり緑りありで、その境内には仏殿・禅堂・天王殿・開山堂等があり、叢林の風格を今もってそなえている。到着すると、竹田学長を導師に拝登の諷経をなし、のち堂内の案内をうけた。

当寺の創立は、光緒二四年(一八九八年)福建鼓山湧泉寺の高僧、善智・妙密の二禅師が來台し、錫を基隆に留めて布教し、寺の建立を発願した。しかし、基礎が定まらぬままに二禅師は示寂。そこで、弟子善慧大師が遺志を継いで殿宇を完成せしめたという。また、師は法名を常覚、別号を靈堂ともいう、光緒七年(一八八一)基隆市に生れ一九歳の時、善智禅師について出家し、鼓山湧泉寺の景峯禅師について具足戒を受けたといわれる。本尊は釈迦牟尼仏で、一八羅漢像、四天王、それに印度より請来の仏舍利、白玉仏像等が祀られており、開山堂には道元・瑩山の両禅師をはじめ開山像等が祀られていた。その他、大正蔵経を



霊泉寺への入口



霊泉寺の藁

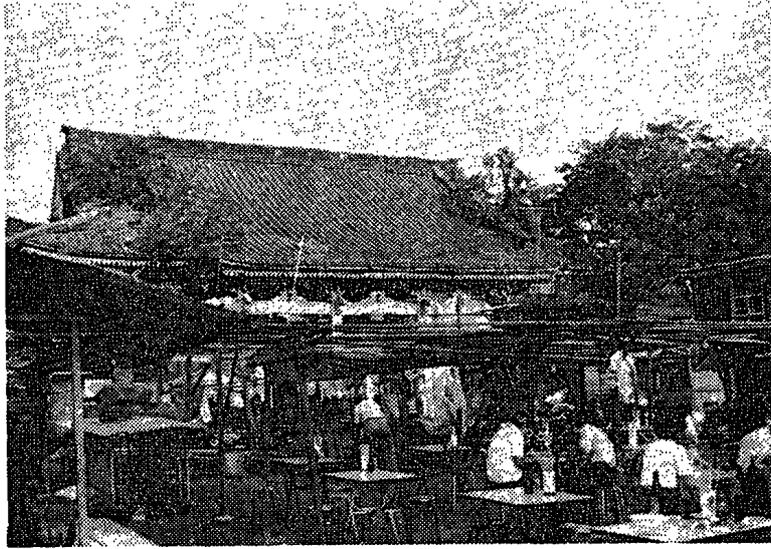


霊泉寺開山堂内部

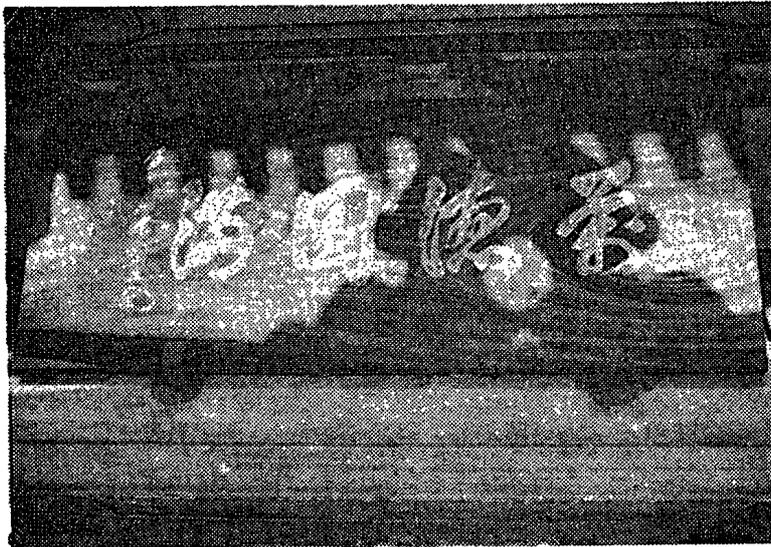
はじめ、古版の経書、山誌等貴重な古文書があったということであるが、多くを散逸してしまった。ちょうど、住職の積晴虚師は、夏季講習のため日本へ行っており留守であったが、関係者により大変あたたかおもてなしを受け、往事をしのぶことができ

た。
見送りを受けながら霊泉寺をあとにして台北市へ、まず泰北高

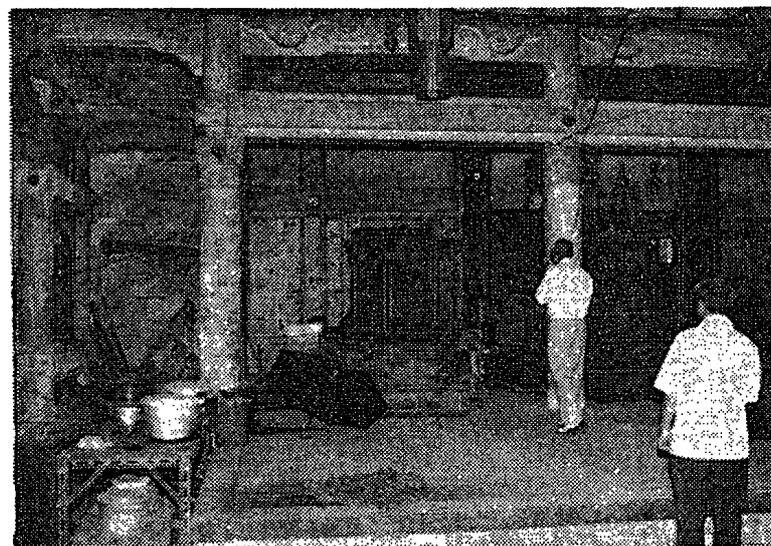
中の女子部を訪問し、続いて、隣りに位置した「曹洞宗台北別院」跡へ案内をしてもらおう。別院跡といっても、しっかりした立派な本堂は残っており、現在は中国大陸からの難民が住みついているあり様である。本尊や両祖の尊像、開山像等、さらに多くの位牌や遺骨等もそのまま、花があげられ香も炷かかっているが、雑然とした堂内となっていた。堂の入口正面には、永平六七世元



「曹洞宗別院」跡



北野元峰禅師の「万徳円満」の額



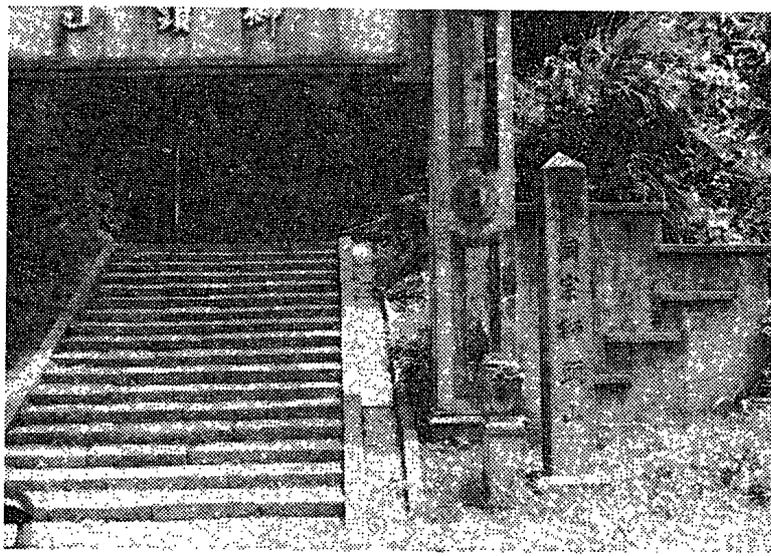
別院本堂入口

峰禅師の書かれた「万徳円満」の額もみられ、往時をしのばせてくれる。

六時過ぎ、ライオンヤングラデール 来来香格里拉大飯店へ戻り、夕食、今日一日の日程も無事終った。

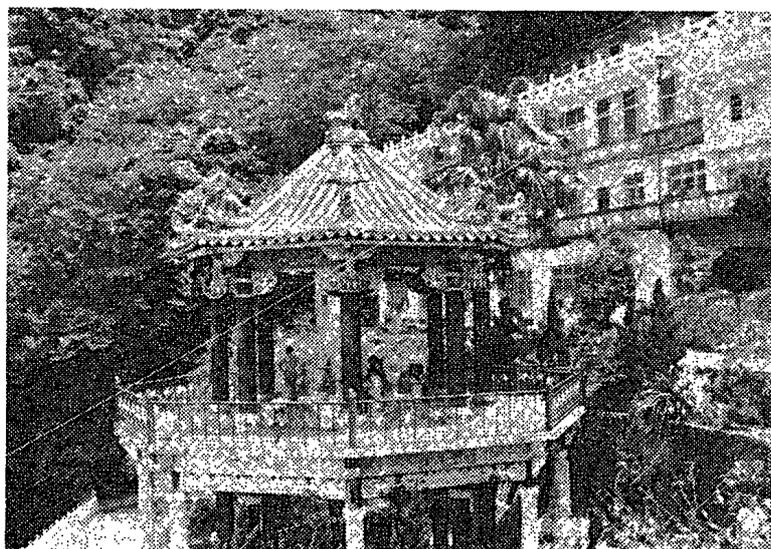
五月二八日（水）午前中は、獅頭山の「開善寺」、新竹の木彫工場見学、そして「永修精舎」等であった。

獅頭山は台北市から南西一〇〇キロ、竹南の東一八キロにある台北近郊の仏教聖地として知られている。海拔五〇〇メートルの山頂に、獅子の頭に似た大岩石があるところから獅頭山の名があるという。「開善寺」は獅子が横たわっているかに見える獅頭山の右前足の付け根の辺に位置していた。聞くところによれば、山全体に一八の寺院があるという。山全体が清浄な聖地のためか、



獅頭山開善寺への登山口

別世界の感がする。また、開善寺への登山口には、右の石柱に曹洞宗獅頭山、左に勸化堂開善寺と彫られた寺標があり、アーチには獅頭山とかかれていた。バスは、その登山口を横目に見て中腹まで登り、そこからは徒歩で巨木岩壁の間をぬって六根清浄と、なだらかな坂を登っていった。開善寺を目前にした時、突然、爆竹の音が全山を走りまわり、われわれを歓迎してくれた。住職魏

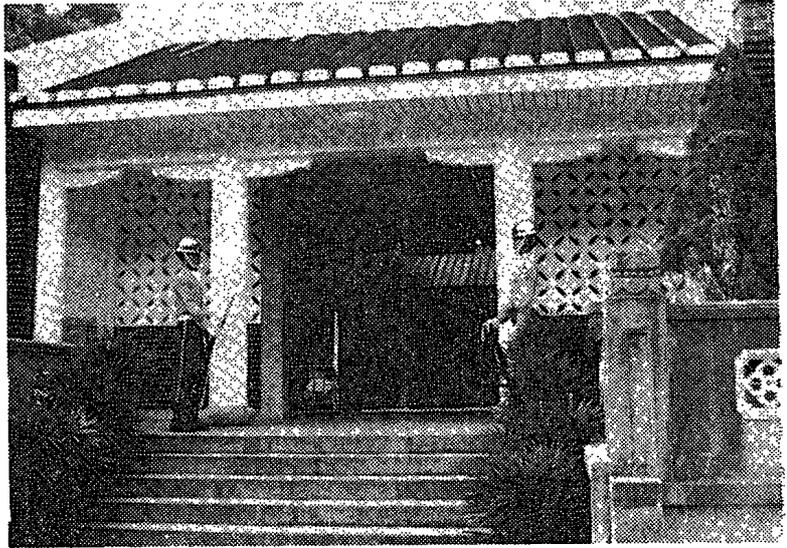


開善寺

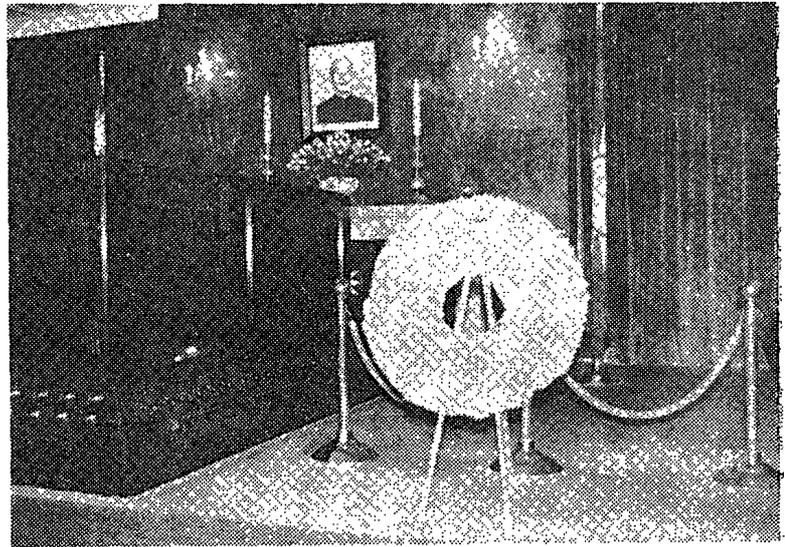
慈湖に着くと、幸い雨は止んでくれた。この静かな山中にある湖水は、蔣介石總統が母堂の慈徳をしのび、故郷の風景に似ているところから名づけたという。ここには、蔣總統の遺体が安置されており、邱議員の計いで、廟の近くまでバスを乗り付け参拝することができた。バスを降りると警備がものしく空気もピンと張り詰めており、戦時体制にある台湾の立場がよく伝わってくる。

達健師の出迎えをうけ、さっそく、拝登諷経をし、その後、精進料理の昼食をいただいた。

時間の関係上、あまり長居はできず、また、空もようも、さっきの雷電のような爆竹のせいでもあるまいが、あやしくなってきたので、いそぎ下山をし次の目的地、慈湖「總統廟」へと向う。途中、新竹の木彫工場へ、着いた時には雨も降りだしていたが、黒檀・紫檀・花梨といった高級家具を見学して、目の保養をしたり溜息をしたりで、近くの「永修精舎」へよった。この寺は、名古屋の尼学林にて修行をし、田島副団長とも面識のある積勝光尼が、慈心院を経営し子供達への奉仕活動をして社会に尽されていた。



蔣介石總統の廟所



廟所の内部

る。あたりは塵一つ落ちていず、樹木をはじめ隅隅までが行き届いていた。湖面には水鳥が行きかい回りの自然と調和して画幅をみる思いであった。

慈湖をあとにして、台湾一のダム・「石門水庫」に向う。止んでいた雨も、また強く降りだしたため、バスの中より景観を眺めるにとどめ、台北市へ戻ることとなった。帰途はバスガイドさん

訪台団記録（神戸）

の歌や、歌を教わりながらで、久しぶりにくつろいだ一時であった。特に、雨降りになんて、「雨夜花」の歌を繰り返し返し繰り返し教わったせいも、今だに耳に残っている。

いよいよ台湾研修旅行も終りに近づいてきたし、台湾の事情にも慣れてきたようである。いろいろ話が弾みだしたが、もっぱら花より団子の食通振りの披露で、中華料理や中国酒の講釈に花を咲かせていた。今夜は国賓大飯店で日本人むきの四川料理と紹興酒に舌鼓を打つこととなっていたが、台湾名物の台風が近づいてきたので、話の大勢も明日の天候へと関心が移ってしまった。

六月二九日（木） 早朝、外をみると看板がとび、オートバイが将棋倒しになっていた。ホテルではあまり感じなかったが、昨夜の台風は近年まれにみるものとか、まだ突風が時々吹いたりして台風一過とはいかない。飛行機も飛び立つものやらわからないという。しかし、台北（中正）国際空港まで、ともかく行き出発を待つこととなった。

欠航するのか、しないのかははっきりしないままいると、どうや

訪台団記録（神戸）

ら予定便の日本アジア航空二一二便DC-10の代りに、一時間三〇分遅れの一五時三〇分にEG二三六便が着き、飛び立つことが出来るらしく、搭乗待合室へと案内される。ところが、飛行機の発着するような気配がない。待つこと数時間、十九時頃になって、EG二三六便も着陸することができず、結局、キャンセルということとなった。そこで、航空会社の手配により、手荷物等をポンドして、仮眠をとるべく、「桃園南華大飯店」というホテルへ行き、軽い食事をとって休む。三〇日（金）の午前二時空港へ、三時四〇分、無事キャセイ航空の機上の人となる。大阪着は七時であった。

今回の「日華友好訪台団」の研修については、学院当局をはじめ多くの人々より、有形無形の御援助御支援をいただいた。台湾の仏教・宗教については長谷部教授の御教示をいただいたし、また、訪問先については、参禅会員の青山氏が現地に赴き打ち合せ等にお骨折りをしてくれました。旅行全般に関しては藤田トラベルの吉田・実広両氏に御世話になりました。さらに、台湾に於ては泰北高中の教職員の方々、本学留学生やその父兄、訪問先の御寺院の関係者等の心くばりは、外国に不慣れなわれわれには心強いものであった。また、省議会の見学、蔣總統廟の参拝には邱議員が奔走してくれました。その他、関係各位のお陰で、友好訪台団の所期の目的を無事達成することができました。紙上をかりて、厚く御礼申し上げます。